森林景観整備シリーズ

第 10 回

風景をゲシュタルトの図と地で考える

技術士（森林部門）　由田 幸雄

はじめに

眺める対象（見たいもの）のよい眺めについては第 172 号で詳しく説明しました。本稿では風景（特に森林景観）の眺めについてゲシュタルト心理学の「図」と「地」で説明します。ゲシュタルトとはドイツ語で形状、図形という意味です。ゲシュタルト心理学では、簡単な図形を使ってものの知覚に関する理論を構築しました。その中で「図」と「地」は、物の見え方に関する基本的な概念です。これは景観の分析において、対象の見え方を論じる際の基本的なものですので説明します。また、さまざまな風景の事例について「図」と「地」の概念を適用した場合、それらが見え方にどのようにかかわっているのかを説明します。

なお、図と地の概念は平面図形を前提としていますが、空間に適用しても有効であることが示されています。つまり、風景にも適用できます。

１　図（ず）と地（じ）について

「図」とは、図形を眺めた場合、形が明確で浮かび上がって見えるものです。一方、「地」とは、明確な形をもたず、図の背景となるものです。簡単すぎて、これだけではよく分からないので、具体例で説明します。

図１では、黒地の中に白地のものが見えています。これは明確な形となって浮かび上がってきます。この形として認識される白地の領域を「図」といいます。黒地の領域は背景となっていて、その形は認識されません。これを「地」といいます。

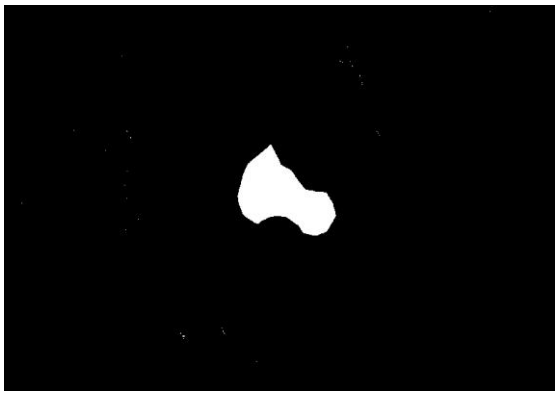

図１　図と地

図と地の境界について

図と地の境界に作り出される線（輪郭線という）は図の領域に属するとされています。図１で説明すると、白地の領域と黒地の領域の境界の輪郭線は図となる白地の領域に属します。また、白地の領域の輪郭線は閉じていますが、自然風景では山の稜線や川の水際線などのように輪郭線が閉じていないものもあります。

図と地が明確でないと単調な眺めになる

図１から、形の明確なものが図として認識されるためには、その背景となる「地」の必要なことが分かります。つまり、図と地の両方が必要です。このことを具体例で示します。

写真１は、グアム島のある展望台から撮ったものです。森林が広がっていますが形は明確でなく、また地形も平坦で変化がないので図となって浮かび上がってくるものはありません。展望台から特に見たいものはなく単調な眺めになっています。

写真１　ある展望台からの眺め

写真２は、高層ビルから東京駅の東側（八重洲）を撮ったものです。

写真２　東京駅東側（八重洲）の眺め

形の明確なビルが林立していますが、地となるものがないので、図として浮かび上がってくるものはありません。このため視線が定まりません。

次に眺めに図と地があると図が浮かび上がってくることを説明します。

写真３の２枚は新宿御苑の広場から撮影方向を少し変えて撮ったものです。

（上）の写真では手前に芝生地が、奥に樹林が見えています。樹林は明確な形を持たないので図となって浮かび上がってきません。一方、(下) の写真では樹林の奥に NTT ドコモタワーが見えています。これは形が明確なので図となり前面に出てきます。このとき空と樹林は地となっています。このように図と地が明確だと主題（テーマ）のある、分かりやすい眺めになります。

なお、(下) はドコモタワーが樹林によって「見切り」されているので、タワーが御苑に隣接しているように見えています。

写真３　新宿御苑広場からの眺め

２　図になりやすいもの

写真３では形が明確なもの (ドコモタワー) が図になりやすいことを示しました。このほ

かに図になりやすいものとしては次が挙げられます。

① 明度差の大きいもの

② 大きいものよりも小さいもの

③ 水平、垂直なもの

これらについて具体例で説明します。

ア 明度差の大きいものは図になりやすい

写真４の２枚は、道路から伐採跡地を撮ったものです。（上）の写真は伐採後まもなく、（下）はそれから８年後に撮ったものです。（上）の写真では、伐採跡地に草が生えていないので土色の地面が目立っており、図となって前面に出てきます。一方、（下）は草が生えてきたので、まわりとの明度差が小さくなり、あまり目立ちません。両方とも伐採箇所の形は明確ですが、明度差の大きいものの方が図になりやすいことが分かります。

写真４　山腹斜面の伐採跡地の眺め

イ 小さいものの方が図になりやすい

写真５は道路から山腹斜面を撮ったものです。樹木はすべてブナなので樹形も色もほぼ同じです。このため山腹を見ても図として浮かび上がってくるものはありません。次にまわりを見渡すと山の稜線が山の輪郭線として見えてきます。しかし、山の稜線は見やすい大きさを超えており、図としては大きすぎます。

写真５　ブナで覆われた山腹斜面（青森市）

写真６は紅葉した山腹斜面を山岳観光道路から撮ったものです。この眺めでは山腹の中央やや左にある黒い樹冠が図となって浮き上がってきます。全体を見渡すと山の稜線も図になりますが、大きすぎるので、最初は黒い樹冠が目に入ってきます。このように、形が大きいものよりも小さいものの方が図になりやすくなります。なお、読者はこの写真を見やすい大きさで見るので、稜線も目立っていると思いますが、実際に見ると大きすぎるので最初は黒い樹冠が目に入ってきます。

写真６　紅葉した山腹斜面（福島市）

ウ 水平、垂直なものは図になりやすい

写真７は京都の渡月橋の下流地点から、大堰川、渡月橋、嵐山を撮ったものです。渡月橋は形が明確で、まわりとの明度差が大きく、水平なので目立っており、図となって前面に出てきます。このとき橋の手前の水面（大堰川）は地になっています。後方に目を転じると嵐山が図となって前面に出てきます。ただ嵐山の仰角は大きすぎるため見やすい眺めではないので、最初は渡月橋が図となって目に入ってきます。

なお、嵐山は急峻なので視線と山腹斜面とのなす角度（視線入射角）が大きくなるので山腹斜面が見やすくなっています。

写真７　渡月橋と嵐山

写真８は建設中の東京スカイツリーを墨田公園から撮ったものです。

写真８　東京スカイツリーの眺め

垂直に伸びているスカイツリーは大変目立っています。ここではスカイツリーが図となり、空と手前の樹林が地(背景)になっています。空には雲がなく等質なので地となってスカイツリーを引き立たせています。

なお、スカイツリーは樹林によって「見切り」されているので樹林のすぐそばに建っているように見えています。(実際は 600m ほど奥に位置しています)。

３ 風景を図と地で評価する

風景はさまざまですが、図と地に着目すると、以下のことがいえます。

ア　図と地が明確だと分かりやすい眺めになる

写真９は道路沿線にある展望台から大橋を撮ったものです。大橋が図となり、森林（アカマツ林）が背景（地）となっています。図と地が明確なので大変分かりやすい眺めになっています。この眺めでは大橋が主役で森林は脇役という感じですが、両者は相互補完の関係にあります。大橋はまわりに緑の森林が広がり地となっているので白いコンクリートの橋が目立っています。一方、森林もコンクリートの白い大橋があるのでそれとの対比によって森林（緑）のよさが引き出されています。このように両者は互いにその良さを高めあっています。なお、大橋は俯角 10 度の見やすい位置にあるので自然と目に入ってきます。

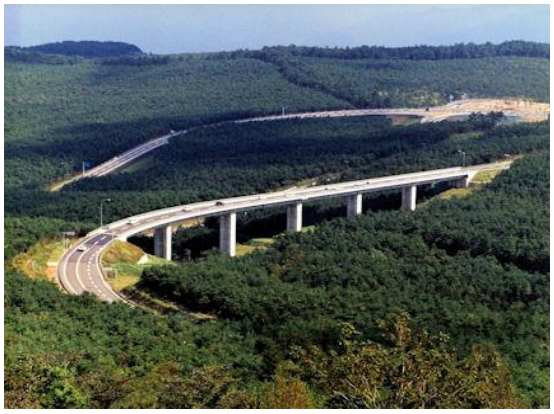

写真９　大橋の眺め（福島市）

写真 10 は、展望所から天橋立を撮ったものです。

天橋立は中央に縦一文字に見えています。天橋立はまわりの水面（海）との明度差が大きく、また等質な水面が地となっているのでひときわ目立っています。この眺めでも天橋立の中央部分が俯角 10 度の見やすい位置にあります。

写真 10 天橋立の眺め

イ　図になるものが多いと変化に富んだ眺めになる

写真 11 は磐梯吾妻スカイライン沿線にある展望台から撮った山岳風景です。奥に見える山の稜線が図となり、手前の森林は地となっています。この眺めでは図となるものが少ないので大変シンプルな眺めになっています。

写真 11 山並みと森林（福島市）

写真 12 は、山岳道路沿線にある展望所から男体山と湯ノ湖を撮ったものです。この 2 つが図となり、森林は地となっています。2 つの図のうち主対象は男体山で湯ノ湖は副対象という感じです。

写真 12 男体山と湯ノ湖（日光市）

写真 13 は、遊歩道沿線にある展望所から池とそのまわりの森林を撮ったものです。池の形は明確で、まわりとの明度差が大きいので図となって浮かび上がってきます。また水面は、その中央部分が俯角 10 度の位置にあるので自然と目に入ってくる、見やすい眺めになっています。次に、そのまわりの森林に目を移すと黒い樹冠が図となって浮き上がってきます。さらにまわりを見渡すと山の稜線が目に入ってきます。

なお、この眺めは森林景観整備（視点の選定、見通しの確保）によって池がすっきりと見えるようになったものです。

写真 13 池と森林の眺め（福島市）

写真 14 は山地の展望台から 2 つの大ダムを撮ったものです。

写真 14　2 つの大ダムの眺め（日光市）

この景色を眺めると、最初に正面の山が目に入ってきます。次に視線を右に移すと五十里ダムが図となって見え、左側を見ると川治ダムが図となって見えます。さらに下方を見ると川治温泉街が図となって目に入ってきます。このように見る範囲によって図となるものは変わってきます。図になる見たいものが多いと変化に富んだ眺めになります。

この眺めも森林景観整備（視点の選定、見通しの確保、展望台の整備、展望台に至る歩道の整備）によって 100m を超える２つの大ダムが同時眺望できるようになったものです。

以上のことから見たいものが図となり、それが多いと、変化に富んだ眺めになることが分かります。

ウ 図となるものが明確でなくても魅力ある眺めになる場合がある

図と地の関係がよいと分かりやすく魅力ある眺めになることを説明しました。しかし、図となるものが明確でなくても魅力ある眺めになる場合があります。たとえば花などの見たいものが眼前に広がっている場合です。具体例で説明します。

写真 15 は昭和記念公園（立川市）でお花畑（菜の花）を撮ったものです。前面に菜の花が広がっており、奥には樹林が見えています。この眺めでは形の明確なものがないので図となって浮かびあがってくるものがありません。しかし、見たいものが大きく広がっているので魅力ある眺めになっています。

写真 15　お花畑の眺め（昭和記念公園）

写真 16 は、高柴山国有林（福島県小野町）のツツジを撮ったものです。山全体にツツジが広がっていて壮観です。ここは地形の変化が少なく図となるものはありませんが、ツツジの圧倒的な広がりに魅了されてしまいます。

写真 16　高柴山のツツジ（福島県小野町）

なお、この眺めは自然に出来たものではありません。地元住民 50～60 人が毎年、ツツジのまわりの草木を刈払いすることによってこのように立派な花を咲かせています。つまり人が守り育てた風景です。

視点と視対象の位置関係について

写真 15 と 16 で説明した眺めは、写真 13 や 14 の眺めとは大きく異なる点があります。それは見る位置（視点）と眺められる対象（視対象）との位置関係です。写真 14 の 2 つの大ダムの眺めでは、視点は眺められる対象から離れた展望台にあります。つまり、視点は視対象の外側にあります。そのため眺めは視覚が中心で絵画的になっています。

一方、写真 15 と 16 では視点は眺められる対象の内側にあります。このため、見る人は視覚だけでなく風や、さまざまな音を聞くなど五感でもって眺めています。そのため臨場感のある眺めになっています。

「景観」と「風景」の違いについて

これについては、さまざまな説明がありますが、その一つに景観は視覚を重視しているが、風景は五感に加えて言葉の世界も含んで構成されているとの説明があります。

エ　見たいものでないものが図になると好ましい眺めにはならない

人工物は形が明確で、白いコンクリートはまわりとの明度差が大きいので、図になりやすく、強く自己主張してきます。このため人工物が見たいものでない場合は景観が阻害されるので好ましい眺めにはなりません。
この事例を 2 つ説明します。

写真 17 の 2 枚は十間橋（墨田区）からスカイツリーを撮ったものです。（上）の写真は建設中に、（下）は完成後に撮ったものです。（上）は、正面にスカイツリーが見えています。また手前の水面を見ると、その倒景が図となって見えます。水路の両側の緑は地となっており、しっとりとした、落ち着いた佇まいがあります。しかし、（下）の完成後は眺めが大きく変わりました。それは、水路の両側がコンクリートで舗装されたため、白いコンクリートの歩道と壁が図となって強烈に自己主張してくるからです。また歩道は見やすい位置にあるので否応なしに目に入ってきます。このため肝心のスカイツリーの眺めが大きく損なわれています。この違いは写真でも分かりますが、現地で見たときは唖然とするほど違いました。

写真 17　スカイツリーの眺め
（上）建設中（下）完成後

写真 18 は、浜離宮恩賜庭園（東京都中央区）の池のほとりから中島の御茶屋を撮ったものです。ここで見たいものは御茶屋ですが、後方の巨大ビル群が図となって前面に出てくるので、繊細な日本庭園の佇まいはひとたまり

もなくかき消されてしまっています。風景には図となるものが必要ですが、見たいものでないものが図になると好ましい眺めにはなりません。

写真 18　巨大ビル群による景観阻害

以上、さまざま風景の事例について、図と地に着目して見てきました。実際の風景は事例のようにシンプルなものばかりではありませんが、これまでに説明したことをまとめると、次のことがいえます。

ア　図と地が明確でないと単調な眺めになる

イ　図と地の関係がよいと、風景に主題（テーマ）のある分かりやすい眺めになる

ウ　図になるものが多いと変化に富んだ眺めになる

エ　図となるものが明確でなくても見る人のまわりに見たいものが広がっていると魅力ある眺めになる

オ　見たいものでないものが図となり自己主張すると好ましい眺めにはならない

４　風景の眺め方

風景を眺めるとき、わたしたちは、次のように見ています。まず図となっていて風景の主題となるもの（見たいもの）をじっくり見ます。次に背景（地）となっているまわりをざっと見ます。そして見たいものが全体の眺めの中でどうおさまっているのかを見ます。背景をじっくり見るということはしません。見たいものはじっくり見ますが、それでも連続して見ている時間は短く、十数秒ほどです。20 秒以上じっと見続けるというのは稀です。つまり、人は風景を図となって前面に出てくる見たいものを中心に見ています。

おわりに、景観は見ることが重要です。特に写真はカラーでないとよく分かりません。森林部門技術士会のホームページのお知らせには、本稿のカラー版が公開されているので、是非そちらをご覧になってください。

参考文献

1　篠原 修（編）：景観用語事典、彰国社、2021

2　中村良夫：風景学入門、中央公論社、1982

3　由田幸雄：森林景観づくり、日本林業調査会、2017